

「雄島参りと冠島」

京都府舞鶴市

冠島(雄島)は、全島がタブノキを主とする常緑広葉樹の原生林におおわれている。島の周囲はほとんどが断崖であるが、南部に、波浪が形成させたとされる沖積層砂礫による平地と州があり、この州の北に、老人島(おいとじま)神社とその境内社である舟玉(ふなだま)神社、少しはなれた州の先に瀬ノ宮神社の小祠が祀られている。

若狭湾沿岸一帯の村から信仰を集めたという冠島は、「雄島さん」と呼ばれ、雄島参りは、若狭湾東部から因幡にいたる広範囲なものであったという。また、かつては競漕の形式で参拝されていた。

冠島は、オオミズナギドリ(オオミズナギドリ)の繁殖地として大正13年(1924)に国の天然記念物に指定されており、一般の上陸が禁止されているが、現在でも、毎年4月から8月までの間に、若狭湾沿岸の漁業地域では、各漁業協同組合単位で参拝するために、舞鶴市教育委員会に上陸許可が申請されることになっている。

祈願する内容は地区によって異なり、海上安全と大漁祈願が主だが、請雨祈願、豊作祈願、蚕業繁盛の祈願も多かったという。請雨祈願する地域は薙刀を持っていくが、海上安全を祈願する地域では刃物は禁忌とされているといった違いがあるほか、雄島の神は女性神と考えられていたので、かつては女性が参ることはできなかった。

かつての雄島参りに使われた舟は、トモウチ・トモボトと呼ばれる、船尾(とも)の船幅が広い伝統的な木造小型和船と、その前段階のマルキブネ(割舟)であったようである。これらの舟を、海上安全と大漁を祈願する漁業地域は単舟による競漕で参り、請雨や豊作を祈願する半農半漁地域では、双舟にカラクムことで往復の安全をはかったという。

冠島を繁殖地とするオオミズナギドリは、南太平洋、インド洋方面から毎年2月頃やってくる渡り鳥で、翼をひろげると1mを超す、長いクチバシをもつ褐色の海鳥である。

この地方の漁民の間では魚群を知らせる鳥とされ、サバドリとも呼ばれている。また、日没後には、数万羽が島の上に「鳥柱が立つ」といわれるほど大群となって集まり、木の間を落下して帰巢する様子は、まさに奇観である。このオオミズナギドリの姿が、冠島の神秘さを増幅させてきたともいえる。



冠島絵図(舞鶴市郷土資料館蔵)

みどころ



- 竜宮浜「ととのいえ」：舞鶴市漁業協同組合竜宮浜支所の愛称で、海産物の販売の他、スキューバダイビング、フィッシングなどの日本海でのレジャーをサポートする施設。毎週土・日曜は、「朝とれ市」が開催されている。
☎ 0773-68-0013